

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第4625051号  
(P4625051)

(45) 発行日 平成23年2月2日(2011.2.2)

(24) 登録日 平成22年11月12日(2010.11.12)

(51) Int.Cl.

F I

A 6 1 B 17/58 (2006.01)

A 6 1 B 17/58 3 1 0

請求項の数 2 (全 10 頁)

(21) 出願番号	特願2007-185849 (P2007-185849)	(73) 特許権者	393024186
(22) 出願日	平成19年7月17日(2007.7.17)		株式会社ホムズ技研
(62) 分割の表示	特願2000-266635 (P2000-266635)		長野県茅野市豊平4734番地352
	の分割	(74) 代理人	100100055
原出願日	平成12年9月4日(2000.9.4)		弁理士 三枝 弘明
(65) 公開番号	特開2007-260446 (P2007-260446A)	(72) 発明者	堀江 誠
(43) 公開日	平成19年10月11日(2007.10.11)		長野県茅野市豊平4734番地352 株
審査請求日	平成19年9月4日(2007.9.4)		式会社ホムズ技研内
		審査官	寺澤 忠司

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 骨接合具

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

スクリュー部及び該スクリュー部より基端側に設けられた軸部を備えたラグスクリューと、該ラグスクリューの前記軸部を収容するスリーブとを有し、前記ラグスクリューが前記スリーブに対して摺動可能に構成され、前記ラグスクリューの基端部に形成された頭部が前記スリーブの先端部を通過できないように構成されて、前記ラグスクリューと前記スリーブとが相互に抜け止めされた状態とされた骨接合具であって、

前記軸部には、前記スリーブに設けられた係合部に対して回転方向に規制されるように構成された第1外面部と、前記係合部に対して回転可能に構成された第2外面部とが軸線方向の異なる部位に設けられ、

前記第1外面部は前記第2外面部より前記ラグスクリューの末端側に設けられ、

前記ラグスクリューの基端部には前記ラグスクリューを回転させるための回転工具を係合させる基端側孔部が設けられ、

前記軸部が前記スリーブから最も引き出され前記頭部が前記スリーブの先端部に当接したときに前記係合部の内側に前記第2外面部が配置されて前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転可能になり、前記軸部が前記スリーブ内に引き込まれて前記頭部が前記スリーブの先端部から離間するとともに前記係合部の内側に前記第1外面部が配置されたときに前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転方向に規制されるように構成されていることを特徴とする骨接合具。

【請求項 2】

スクリュー部及び該スクリュー部より基端側に設けられた軸部を備えたラグスクリューと、該ラグスクリューの前記軸部を収容するスリーブとを有し、前記ラグスクリューが前記スリーブに対して摺動可能に構成され、前記ラグスクリューの基端部に形成された頭部が前記スリーブの先端部を通過できないように構成されて、前記ラグスクリューと前記スリーブとが相互に抜け止めされた状態とされた骨接合具であって、

前記スリーブには、前記軸部に設けられた被係合部に対して回転止めされるように構成された第１内面部と、前記被係合部に対して回転可能に構成された第２内面部とが軸線方向の異なる部位に設けられ、

前記第１内面部は前記第２内面部より前記スリーブの後端側に設けられ、

前記ラグスクリューの基端部には前記ラグスクリューを回転させるための回転工具を係合させる基端側孔部が設けられ、

10

前記軸部が前記スリーブから最も引き出され前記頭部が前記スリーブの先端部に当接したときに前記被係合部が前記第２内面部の内側に配置されて前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転可能になり、前記軸部が前記スリーブ内に引き込まれて前記頭部が前記スリーブの先端部から離間するとともに前記被係合部が前記第１内面部の内側に配置されたときに前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転方向に規制されるように構成されていることを特徴とする骨接合具。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【０００１】

20

本発明は、骨接合具に係り、特に、大腿骨の頭部近傍の骨折を修復するために好適な骨ネジを含む接合具に関する。

【背景技術】

【０００２】

従来から、大腿骨の頭部近傍の骨折を修復、固定するための骨接合装置が知られている。このような骨接合装置としては、例えば腰部圧縮スクリュー（ＣＨＳ）と呼ばれる、末端側にスクリュー部を備え、基端側に軸部を備えたラグスクリューと、このラグスクリューに係合する取付体とからなる装置がある。

【０００３】

この取付体は、大腿骨の表面に沿って配置され骨ネジ等によって固定されるプレート部と、このプレート部の一端に接合された円筒状のスリーブ部とを備えている。スリーブ部はラグスクリューの軸部を収容するように構成されている。

30

【０００４】

この種の装置においては、スリーブ部の先端にラグスクリューの末端を自在に挿入できるように構成されている第１のタイプと、スリーブ部にラグスクリューが既に挿入されていて、ラグスクリューがスリーブ部に対して摺動可能になっているが、ラグスクリューの基端の拡径した頭部がスリーブ部の先端の係合部に係合し、ラグスクリューがスリーブ部から離反しないように抜け止めされている第２のタイプとがある。

【０００５】

第１のタイプの装置においては、ラグスクリューだけを先に大腿骨にねじ込み、その後、大腿骨にねじ込まれたラグスクリューの軸部の基端をスリーブ部の先端に挿入するようにして取付体を差し込み、最後に取付体のプレート部を骨ネジなどで大腿骨の表面上に固定する。この場合、スリーブの内面とラグスクリューの軸部の外面とは、キーと溝、若しくは角穴と角柱のように、相互に回転方向に係合する構造を備えており、これによって、大腿骨への取付け完了後にラグスクリューが回転し、その結果大腿骨頭部が回旋して骨折部が損傷を受けるという事態を招かないように配慮されている。

40

【０００６】

一方、第２のタイプの装置においては、スリーブ部に挿入されたラグスクリューを大腿骨にねじ込み、そのまま取付体を位置決めして、取付体のプレート部を骨ネジなどで大腿骨の表面上に固定する。この場合、スリーブ部に収容されたラグスクリューをねじ込み可

50

能にするために、ラグスクリューの軸部とスリーブ部とは相互に回転自在に構成されている。

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0007】

上記従来の骨接合装置のうち上記第1のタイプの装置においては、大腿骨への取付け完了後に、ラグスクリューが取付体に対して回転しないように構成されているが、ねじ込みが完了したラグスクリューの回転姿勢によっては、取付体のスリーブ部を挿入したとき、取付体のプレート部の長手方向が大腿骨の長手方向と整合せず、プレート部を固定することができない場合があるので、この場合には一旦取付体を取り外し、ラグスクリューの回転姿勢を微調整した後に、再度取付体のスリーブ部をラグスクリューに挿入しなおす必要があり、手術に熟練が必要で、しばしば作業が煩雑になるという問題点がある。

10

【0008】

一方、上記第2のタイプの装置では、ラグスクリューが予めスリーブに挿入されているので、取り扱いがやや容易になる反面、ラグスクリューの軸部をスリーブ部に対して回転可能に構成しておかないとラグスクリューの大腿骨へのねじ込みができなくなるため、取付け完了後もラグスクリューが取付体に対して回転してしまうので、大腿骨の頭部がラグスクリューとともに回旋し、骨折部を損傷してしまう恐れがあった。

【0009】

上記の第2のタイプの欠点を解消するには、ラグスクリューの大腿骨へのねじ込みが完了した後に、ラグスクリューと取付体とを何らかの回転止め手段によって係合させることが考えられる。しかしながら、そのような構造は装置を複雑にし、製造コストを増大させるという問題点がある。

20

【0010】

そこで、本発明は上記課題を解決するものであり、その課題は、手術における取付け作業が容易であるとともに、手術後においてラグスクリューの回転を防止することのできる骨接合具を簡易な構造で実現することにある。

【課題を解決するための手段】

【0011】

本発明の骨接合具は、スクリュー部及び該スクリュー部より基端側に設けられた軸部を備えたラグスクリューと、該ラグスクリューの前記軸部を収容するスリーブとを有し、前記ラグスクリューが前記スリーブに対して摺動可能に構成され、前記ラグスクリューの基端部に形成された頭部が前記スリーブの先端部を通過できないように構成されて、前記ラグスクリューと前記スリーブとが相互に抜け止めされた状態とされた骨接合具であって、前記軸部には、前記スリーブに設けられた係合部に対して回転方向に規制されるように構成された第1外面部と、前記係合部に対して回転可能に構成された第2外面部とが軸線方向の異なる部位に設けられ、前記第1外面部は前記第2外面部より前記ラグスクリューの末端側に設けられ、前記ラグスクリューの基端部には前記ラグスクリューを回転させるための回転工具を係合させる基端側孔部が設けられ、前記軸部が前記スリーブから最も引き出され前記頭部が前記スリーブの先端部に当接したときに前記係合部の内側に前記第2外面部が配置されて前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転可能になり、前記軸部が前記スリーブ内に引き込まれて前記頭部が前記スリーブの先端部から離間するとともに前記係合部の内側に前記第1外面部が配置されたときに前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転方向に規制されるように構成されていることを特徴とする。この発明によれば、軸部を引き出した状態でラグスクリューを回転させて骨内にねじ込み、その後、スリーブを骨内に押し込んだときには、軸部がスリーブ内に引き込まれた状態となるので、スリーブに対してラグスクリューが回転方向に規制される。

30

40

【0012】

本発明において、前記係合部は、前記スリーブの先端部に設けられていることが好ましい。係合部がスリーブの先端部に設けられていることにより、係合部を形成するためのス

50

リーブの加工が容易になるとともに、ラグスクリューのスリーブに対する実効的な摺動範囲を大きく採ることができる。

【 0 0 1 3 】

次に、本発明の別の骨接合具は、スクリュー部及び該スクリュー部より基端側に設けられた軸部を備えたラグスクリューと、該ラグスクリューの前記軸部を収容するスリーブとを有し、前記ラグスクリューが前記スリーブに対して摺動可能に構成され、前記ラグスクリューの基端部に形成された頭部が前記スリーブの先端部を通過できないように構成されて、前記ラグスクリューと前記スリーブとが相互に抜け止めされた状態とされた骨接合具であって、前記スリーブには、前記軸部に設けられた被係合部に対して回転止めされるように構成された第 1 内面部と、前記被係合部に対して回転可能に構成された第 2 内面部とが軸線方向の異なる部位に設けられ、前記第 1 内面部は前記第 2 内面部より前記スリーブの後端側に設けられ、前記ラグスクリューの基端部には前記ラグスクリューを回転させるための回転工具を係合させる基端側孔部が設けられ、前記軸部が前記スリーブから最も引き出され前記頭部が前記スリーブの先端部に当接したときに前記被係合部が前記第 2 内面部の内側に配置されて前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転可能になり、前記軸部が前記スリーブ内に引き込まれて前記頭部が前記スリーブの先端部から離間するとともに前記被係合部が前記第 1 内面部の内側に配置されたときに前記ラグスクリューが前記スリーブに対して回転方向に規制されるように構成されていることを特徴とする。

10

【 0 0 1 4 】

本発明において、前記被係合部は、前記軸部の基端部に設けられていることが好ましい。これにより、被係合部を形成するためのラグスクリューの加工が容易になるとともに、ラグスクリューのスリーブに対する実効的な摺動範囲を大きく採ることができる。この場合に、被係合部を頭部とすることが望ましい。

20

【発明の効果】

【 0 0 1 5 】

以上説明したように本発明によれば、ラグスクリューを骨内にねじ込む際にはラグスクリューをスリーブに対して回転可能にし、骨接合装置を骨に取付け終わったときにはラグスクリューをスリーブに対して回転方向に規制することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【 0 0 1 6 】

次に、添付図面を参照して本発明に係る骨接合具の実施形態について説明する。図 1 及び図 2 は本実施形態の骨接合具を用いた骨接合装置の全体構造を示す部分断面図であり、図 3 は本実施形態のスリーブとラグスクリューとからなる骨接合具の組立構造を示す分解斜視図である。

30

【 0 0 1 7 】

本実施形態は、末端に設けられたスクリュー部 1 1 及びこのスクリュー部 1 1 より基端側に設けられた軸部 1 2 を備えたラグスクリュー 1 0 と、このラグスクリュー 1 0 の軸部 1 2 を収容するスリーブ 1 3 及びこのスリーブ 1 3 を接続するように構成されたプレート 1 4 からなる取付体とを有している。

【 0 0 1 8 】

ラグスクリュー 1 0 は、大腿骨の外側面から大腿骨頭部へ向けて斜め上方にねじ込まれるものである。その中心にはガイドピン（ガイドワイヤ）を挿通するための軸孔が設けられている。

40

【 0 0 1 9 】

ラグスクリュー 1 0 のスクリュー部 1 1 は骨内においてタッピングを行いながら骨にしっかりと結合するように構成されている。ラグスクリュー 1 0 の軸部 1 2 は、他の部分よりもやや拡径された頭部 1 2 a と、この頭部 1 2 a の末端側に隣接して形成されたやや縮径された円筒外面部 1 2 b と、この円筒外面部 1 2 b の末端側に隣接して形成された異形外面部 1 2 c とを備えている。この異形外面部 1 2 c は、図 3 に示すように、円筒面の相互に対向する部分に一对の平坦面 1 2 c 1 を形成してなる外面形状を有するものであり、

50

その断面形状は図中において 1 2 s として示してある。

【 0 0 2 0 】

一方、スリーブ 1 3 は全体として円筒形状に形成され、やや縮径した内縁を有する先端部 1 3 a と、プレート 1 4 の外面と適合するように斜めに形成された後端部 1 3 b とを備えている。先端部 1 3 a の内縁は全周にわたり内側へ突出して係止部を構成する。すなわち、上記ラグスクリュー 1 0 の異形外面部 1 2 c に対し、回転方向に係合し得る内縁形状、すなわち円形の対向する一対の部分がほぼ平坦に形成されてなる開口形状、に形成されている。

【 0 0 2 1 】

プレート 1 4 は、その一端側に上記スリーブ 1 3 の後端部 1 3 b を収容する傾斜した取付孔 1 4 a を備えているとともに、プレート 1 4 を大腿骨の外側表面上に固定するための、図示しない骨ネジを挿通して係合させるように構成された複数の固定孔 1 4 b を備えている。ここで、図示のようにスリーブ 1 3 の外面に形成された横溝 1 3 c に対して係合するリブ 1 4 c を出沒自在に構成するなどの方法で、スリーブ 1 3 とプレート 1 4 とを着脱自在に構成してもよく（例えば、リブをバヨネット構造で出沒自在に構成するなど、特公平 5 - 8 1 2 5 4 号公報や実用新案登録第 2 5 0 4 4 1 1 号公報に記載されている構造を採用してもよく）、或いは、スリーブ 1 3 とプレート 1 4 とが溶接等によって固着されているなど、一体に構成されていてもよい。

【 0 0 2 2 】

図 3 に示すように、ラグスクリュー 1 0 の基端部 1 2 d は、スリーブ 1 3 の先端部 1 3 a を通過できる外径に形成され、この軸部 1 2 をスリーブ 1 3 内に挿通させた後、基端部 1 2 d に円筒状の環状部材 1 2 e を溶着、接着等によって固着させることにより、上記頭部 1 2 a が形成される。この頭部 1 2 a は先端部 1 3 a を通過できないように構成されているので、ラグスクリュー 1 0 とスリーブ 1 3 とは相互に抜け止めされた状態になる。

【 0 0 2 3 】

なお、図 1 及び図 2 に示すように、ラグスクリュー 1 0 の基端部 1 2 d には、上記軸孔に連通する基端側孔部が設けられ、この基端側孔部の浅い部分は回転工具（図示せず）に係合させるための角穴 1 2 f となり、また、その穴の深い部分には雌ネジ部 1 2 g が形成される。この雌ネジ部 1 2 g に螺合する雄ネジ部を有する牽引器具（図示せず）によって、大腿骨頭部の骨折部を整復するためにラグスクリュー 1 0 を牽引することができる。

【 0 0 2 4 】

図 4 ( a ) には、スリーブ 1 3 の先端部 1 3 a と、上記異形外面部 1 2 c との係合状態を示す。図示点線で示す円筒外面部 1 2 b は先端部 1 3 a の内部で回転自在に構成されているが、異形外面部 1 2 c は先端部 1 3 a 内において回転方向に固定されるように構成されている。

【 0 0 2 5 】

図 4 ( b ) に示すものは上記実施形態とは異なる実施形態におけるスリーブの先端部 2 3 a とラグスクリューの異形外面部 2 2 c との係合状態を示すものである。この先端部 2 3 a の内縁は角孔形状（図示例では 6 角孔）に形成され、異形外面部 2 2 c の外面は、その角孔形状に対応した角形状（図示例では 6 角形）に形成されている。この場合の円筒外面部 2 2 b の外面は、異形外面部 2 2 c の角形状の内接円とほぼ等しい断面形状を備えている。

【 0 0 2 6 】

図 4 ( c ) に示すものは上記実施形態とは異なる別の実施形態におけるスリーブの先端部 3 3 a とラグスクリューの異形外面部 3 2 c との係合状態を示すものである。この先端部 3 3 a の内縁には回転方向に複数の曲面状の凸部若しくは凹部が形成され、異形外面部 3 2 c の外面は、その凸部若しくは凹部に対応する凹溝若しくは凸リブを有する形状に形成されている。この場合の円筒外面部 3 2 b もまた、異形外面部 3 2 c の断面の内接円形状とほぼ等しい断面形状を備えている。

【 0 0 2 7 】

10

20

30

40

50

次に、本実施形態の骨接合装置を用いて大腿骨の頭部近傍の骨折を修復する方法について説明する。例えば、大腿骨の頸部骨折においては、まず、大腿骨の外側表面からガイドピンを挿入し、大腿骨の頭部内にガイドピンの先端部が到達するようにセットする。次に、このガイドピンに沿ってリーマ等の穿孔器具を導入し、大腿骨の外側表面から大腿骨の頭部内に向けて穿孔する。このとき、取付体のスリーブを収容できるようにするために、穿孔された穴のうち外側表面に近い浅い部分を、深い部分よりもやや大きな内径を有するように形成する。

【0028】

次に、ガイドピンに沿ってラグスクリュー10を大腿骨にねじ込む。ここで、ラグスクリュー10は上述のように取付体に接続された状態になっているが、ラグスクリュー10をスリーブ13から最も突出させた図1に示す状態とすることにより、軸部12の円筒外面部12bがスリーブ13の先端部13aの内側に配置され、その結果、ラグスクリュー10をスリーブ13に対して回転自在にすることができる。そして、この状態でラグスクリュー10の頭部12aの端面に穿設された角穴12fにドライバー工具の先端を挿入して回転させ、ラグスクリュー10を骨内にねじ込んでいく。

【0029】

ラグスクリュー10のスクリュー部11が大腿骨頭部の内部に導入され、十分な深さまで達すると、プレート14を大腿骨の外側表面に押し付けるようにして、スリーブ13を大腿骨の外側表面に穿設された穴内に押し込む。この状態を図2に示す。この状態では、スリーブ13の先端部13aがラグスクリュー10の軸部12のうちの異形外面部12cに係合した状態となり、スリーブ13に対してラグスクリュー10が回転方向に規制される。

【0030】

最後に、プレート14の固定孔14bを通して大腿骨の外側表面から図示しない骨ネジをねじ込み、プレート14を大腿骨の外側表面上に固定する。

【0031】

以上説明したように、本実施形態では、スリーブ13の先端部13aとラグスクリュー10の円筒外面部12bとが対向する状態でラグスクリュー10を回転させて骨内にねじ込み、ねじ込みが完了した後にスリーブ13を押し込むことにより、その先端部13aがラグスクリュー10の異形外面部12cに対して回転方向に係合するように構成することができ、この状態でプレート14を骨の表面上に固定できる。したがって、骨への取付けが完了した状態でラグスクリュー10がプレート14に対して回転しないように規制することができる。したがって、手術後にラグスクリュー10とともにスクリュー部11に固定された骨折部分が回旋し、骨折部の損傷を引き起こすという事態の発生を回避することができる。

【0032】

また、ラグスクリュー10を骨内にねじ込んだ状態で、軸部12の異形外面部12cとスリーブ13の先端部13aとの回転方向の姿勢が整合しない場合、そのままスリーブ13及びプレート14を外側に引き出し、円筒外面部12bがスリーブ13の先端部13aに対向した状態としてラグスクリュー10の回転姿勢を微調整し、再びスリーブ13及びプレート14を押し込んでスリーブ13の先端部13aを異形外面部12cに係合させるようにすることができるので、熟練者でなくとも手間をかけずに容易に手術を行うことができる。

【0033】

なお、上記スリーブの先端部13aは、ラグスクリューの第2外面部に相当する円筒外面部12bと、第1外面部に相当する異形外面部12cとにそれぞれ作用する上記の係合部に相当するものであるが、この係合部はスリーブの先端部である必要はなく、先端部以外の適宜の部位に設けることが可能である。

【0034】

図5は、上記実施形態とは異なる別の実施形態の構造を示すものである。この実施形態

10

20

30

40

50

において、プレート 14 は上記の実施形態と同様であり、その説明は省略する。

【0035】

この実施形態では、ラグスクリュー 40 は、上記と同様にスクリュー部 41 及び軸部 42 を有する。このラグスクリュー 40 において、軸部 42 の基端には角形状（図示例では六角形状）の頭部 42a が設けられ、この頭部 42a 以外の軸部は頭部 42a の内接円以下の外径を有する円筒状部 42b となっている。

【0036】

また、スリーブ 43 は、ラグスクリュー 40 の円筒状部 42b が挿通することはできるが、頭部 42a が脱出しないように抜け止めする先端部 43a と、この先端部 43a よりも後端部 43b 寄りに形成され、ラグスクリュー 40 の頭部 42a の外接円以上の内径を有する円筒内面部 43d と、この円筒内面部 43d よりも後端部 43b 寄りに形成され、ラグスクリュー 40 の頭部 42a に対して回転方向に係合し得る角形状（図示例では六角孔状）の異形内面部 43e とを備えている。

【0037】

この実施形態において、ラグスクリュー 40 がスリーブ 43 から突出した状態（図 5 に示す状態）では、ラグスクリュー 40 の頭部 42a がスリーブ 43 の円筒内面部 43d 内に配置されているので、ラグスクリュー 40 はスリーブ 43 及びプレートに対して自在に回転することができる。また、ラグスクリュー 40 が図 5 に示す状態よりもスリーブ 43 の内部に引き込まれた状態では、ラグスクリュー 40 の頭部 42a が異形内面部 43e 内に配置され、相互に回転方向に係合する。したがって、ラグスクリュー 40 はスリーブ 43 及びプレートに対して回転方向に固定（規制）された状態となる。

【0038】

この実施形態においても、上記の図 1 乃至図 3 に示す実施形態と同様の作用効果を奏する。なお、上記の頭部 42a の外面形状と異形内面部 43e とは、上記実施形態と同様に（図 4 に示すように）、種々の回転規制態様を採ることができる。また、上記頭部 42a はスリーブの第 2 内面部に相当する円筒内面部 43d 及び第 1 内面部に相当する異形内面部 43e にそれぞれ作用する上記の被係合部に相当するものであるが、この被係合部はラグスクリューの頭部である必要はなく、頭部以外の適宜の部位に設けることができる。

【図面の簡単な説明】

【0039】

【図 1】本発明の骨接合具の実施形態におけるラグスクリューを骨内にねじ込む際の状態を示す部分断面図である。

【図 2】同実施形態における取付け完了状態を示す部分断面図である。

【図 3】同実施形態におけるラグスクリューとスリーブの分解斜視図である。

【図 4】同実施形態におけるラグスクリューとスリーブの回転方向の規制態様を示す部分断面図（a）～（c）である。

【図 5】上記実施形態とは異なる実施形態の部分断面図である。

【符号の説明】

【0040】

10, 40 ラグスクリュー

11, 41 スクリュー部

12, 42 軸部

12a, 42a 頭部

12b 円筒外面部

12c 異形外面部

13, 43 スリーブ

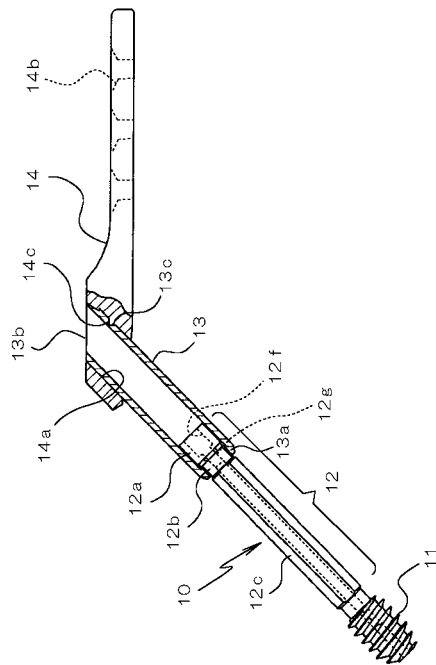
13a, 43a 先端部

14 プレート

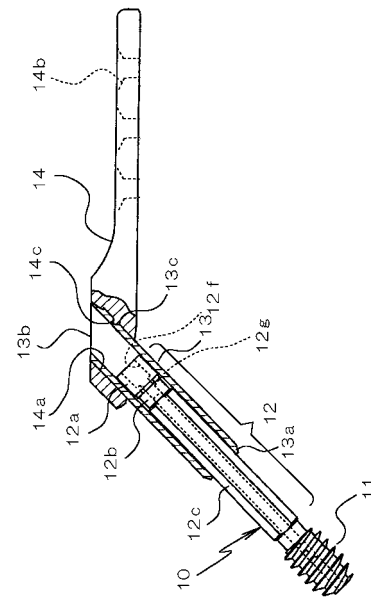
43d 円筒内面部

43e 異形内面部

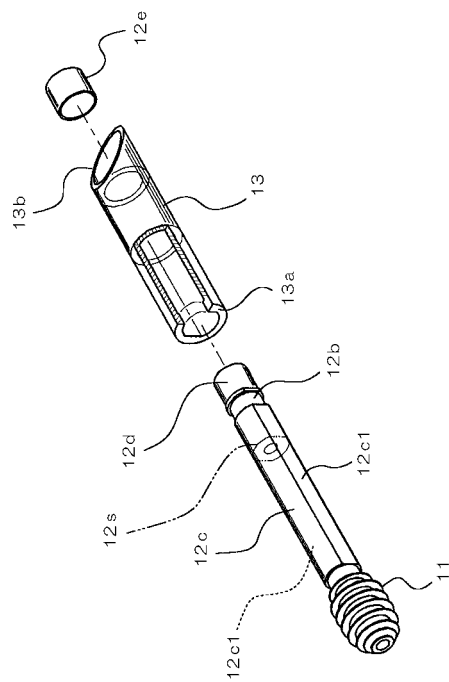
【図 1】



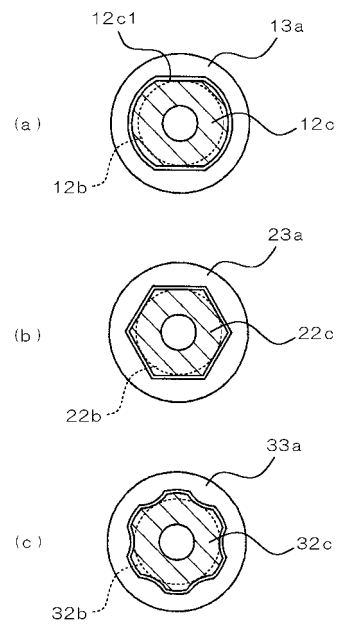
【図 2】



【図 3】

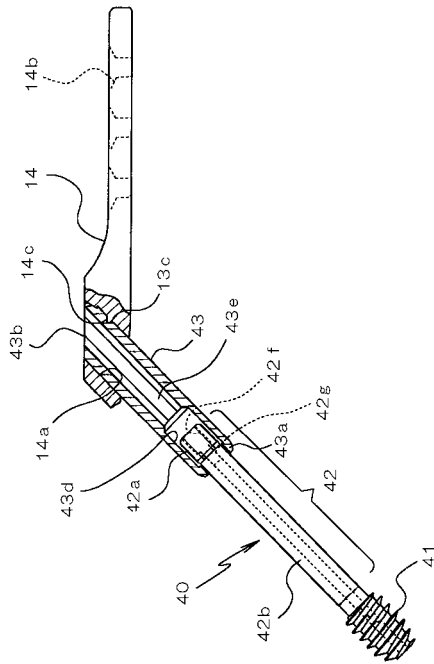


【図 4】





【図5】



---

フロントページの続き

- (56)参考文献 特開平 0 9 - 1 0 8 2 3 7 ( J P , A )  
登録実用新案第 3 0 2 1 1 4 9 ( J P , U )  
特開平 1 1 - 1 3 7 5 6 6 ( J P , A )  
特開平 0 8 - 0 9 8 8 4 6 ( J P , A )

- (58)調査した分野(Int.Cl. , D B 名)  
A 6 1 B 1 7 / 5 6 - 1 7 / 9 2